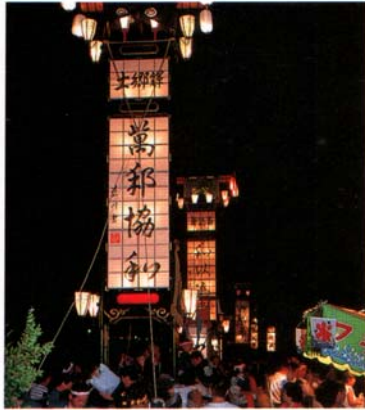


十五

お熊甲祭のお囃子



「さわやかな風にたなびく深紅の粹旗が能登、中島町に秋の訪れをつけます。天狗の面と大陸文化を感じさせる装束。猿田彦を先頭に20メートルもの大きな粹旗を担ぐ行列が続きます。自然と共に生き、神との交流を心から喜び、たのしみ、感謝する祭りです。」



かいせつ

中島町の久麻加夫都阿良加志比古神社（通称熊甲神社）の秋祭りは、奇祭として名高い祭りです。同神社に祀られている、「久麻加夫都阿良加志比古神社座像」は、大陸風の衣装をまとっていることから、古くより大陸との交易があったものと思われます。お熊甲祭は、秋の収穫の歡喜と感謝を表現した祭りであり、近隣に点在する19の末社から出発した祭り行列が本社の熊甲神社に集まる「寄り合い祭り」という珍しい形態をとっています。末社から繰り出した神輿は、神様の使いである天狗面の猿田彦を先導に、高さ20mもの深紅の粹旗や、華やかさを添えるお道具持ちの御伽衆を従え本社を目指します。「イヤサカサー」という掛声と、独特の鉦・太鼓のリズムに合わせた行列は、本社に着くと、花笠、手甲等で飾った若衆が鉦・太鼓を打ち鳴らし、猿田彦が境内いっばいに乱舞します。金色に輝く神輿、地上すれすれまで傾けられる粹旗などその様は壮観を極め、一大時代絵巻そのものの世界が展開されます。

